

「安心と豊かさを創るということ～聴覚障害者生活支援事業の取組みより～」

特定非営利活動法人

コミュニケーション支援センターふくろう

発表者 森田 絵理・小村 博子

共同研究者 笹間真智子・福本 尚子

黒田 紘子・小林 典子

1. 問題提起

一般的に「コミュニケーション」とは「音声で会話し、音声で伝える」と意味することが多い。つまり、このような「音声言語社会」の中で、聴覚障害者にとっては、「聞こえない」状態そのものより、自分の意思が伝わらない、また相手の意思がつかめない「コミュニケーション障害」や情報が得られない「情報障害」に苦しむ。そのため、孤立しやすく、疎外されやすくなってしまふ。さらに、この障害は外見からは見えない「分かりにくい障害」であるために、周囲から理解されなかつたり誤解されやすかつたりする。

このような状況の中、平成 18 年に鳥取県西部圏域において当事者・関係者の長年の夢であった、聴覚障害者の支援活動拠点である「コミュニケーション支援センターふくろう」が設立された。当センターは、手話通訳者派遣事業などの公的事業を交え、各種事業を実施しており、聴覚障害者生活支援事業（以下、ミニデイサービスという）もそのひとつである。なお、このミニデイサービスは、現在、鳥取県西部圏域のみで定期的実施している。開始当初 2 年間は、「独立行政法人福祉医療機構 長寿・子育て・障害者基金事業助成金」の助成を受けていたが、その後は、鳥取県と米子市のモデル事業「聴覚障害者生活支援事業」に移行し、事業継続している。ミニデイサービスでは、上記の問題から同じ障害を持つ人達の日中活動の機会や集える場を提供する事で、お互いの生活の質を高め合い、健康や生きがいを維持しあるいは取り戻して、自立した地域生活へと結びつけることを目的として実施している。

現在、ミニデイサービスを始めて丸 4 年が経ち、新たな課題の整理や成果などを振り返り、今後の活動充実につなげていくことに重点を置きながら取り組んでいる。

開始 1 年目には、本研究学会第 1 回研究発表会の場において、活動開始の様子を発表させて頂いた。

2. 目的

住み慣れた地域で同じ聴覚障害者が集い、“安心と豊かさを創るため”に今後もミニデイサービスの活動を推進する。活動を通じて見えてきた課題を私たちのみではなく、社会全体的な課題を共通理解になるようにと積極的な発信を行う。

3. 方法

活動内容の充実－利用者主体の取組みへ

4. 成果・課題

成果・聴覚障害者支援員の存在－同障害の役割

- ・コミュニケーションと情報の保障－眠っていたことば、共通のことば作り
- ・地域とのつながり
- ・仲間力－「個々の力」・「集団の力」の成長

課題・参加できない方達へのコミュニケーションと情報の保障－「出向く」事業への必要性

- ・利用者の拡大－重複障害者、難聴者・中途失聴者等の掘り起こしと課題整理
- ・継続性のある事業へ－安定した財源の確保、行政・関係機関などとの連携